東北芸術工科大学東北文化研究センター 『研究紀要』16 (2017年3月) 抜刷

縄文時代中期「小梁川・大梁川編年」に関する覚書

小 林 圭 一

# 縄文時代中期「小梁川・大梁川編年」に関する覚書

小 林 圭 一

## 1. はじめに

宮城県七ヶ宿町に所在する小梁川遺跡と大梁川遺跡は、2kmの至近に位置する縄文時代前期末葉~中期末葉 (駐1)の山間部の拠点的集落跡である。小梁川遺跡は前期末葉 (大木6式) ~中期中葉 (同8a式)、大梁川遺跡は中期後葉 (大木9式) ~中期末葉 (同10式) に主体があり、一時的な衰退期 (大木8b式) を経るものの、年代的にスムーズに推移することから、前者から後者に集落が移行し、同じ出自の集団により営まれた可能性が想定されている。両遺跡では住居跡等の遺構の他に大規模な捨て場跡が形成され、膨大な土器資料が重層して出土した。取り分け小梁川遺跡の東側遺物包含層では大木6~7b式土器の5階梯、大梁川遺跡の南側遺物包含層では大木9~10式土器の4階梯にわたる変遷が層位的に分離され、その成果に基づいて相原淳一氏より所謂「小梁川・大梁川編年」(相原ほか1986、相原ほか1988)が提示され、東北中・南部の縄文中期編年研究の指標に位置づけられた経緯がある。

東北中・南部の縄文中期は山内清男氏(山内1937)により、大木7a 式  $\rightarrow$  同7b 式  $\rightarrow$  同8a 式  $\rightarrow$  同8b 式  $\rightarrow$  同 9 式  $\rightarrow$  同10式の6型式に区分されたが、両遺跡の成果により大木8a 式を除く各型式が2 細分され、計11階梯からなる変遷序列が提示されたことになる。しかし発掘調査報告書の考察として公表され、器種類型の分類と解説に重点が置かれ、論文として体系的にまとめられてこなかったため、他の遺跡との対比において理解しにくい面も存していた。

小論では、東北中・南部の縄文中期編年の理解を促すため、3冊の発掘調査報告書(相原ほか1986、村田ほか1987、相原ほか1988)所収の主要な土器を一覧にして、その特徴を簡便に記し理解の一助とした。当該土器の型式研究は更なる細分が進行しており、報告から30年が経過した「小梁川・大梁川編年」は旧態依然とした状況にあることも否めない。しかし層位的分離に基づいた両遺跡の成果は、編年研究において今なお大きな比重を占めており、土器の内容を今日的観点から整理する意義があるように思われる。

# 2. 小梁川遺跡の概要

# (1) 小梁川遺跡の立地と調査の経緯

小梁川遺跡は宮城県の南西端、白石川に沿った刈田郡七ヶ宿町字小梁川・字板沢・字白ハゲに位置する。白石川は流路延長60.2kmの阿武隈川水系の左支川で、山形県境となる奥羽山系の蔵王連峰の南麓を水源とし、大梁川や小梁川等の小河川を合わせ蛇行しながら東流し、その流域には狭長な山間盆地(七ヶ宿盆地)が形成されるが、その後北方に流路を変え白石盆地に流入し、大河原・船岡等の盆地を繋いで、柴田町槻木付近で阿武隈川に合流する。また白石川を西方に遡ると奥羽脊梁山脈の鞍部である二井宿峠に至り、山形県内の最上川上流域の米沢盆地の北東端に通じている(図1~3)。

小梁川遺跡は阿武隈川との合流点から白石川を約41km(直線で29km)遡った左岸の河成段丘に立地しており、南流する小梁川との合流点に当たり、遺跡の南端は白石川に面する段丘崖、東端は小梁川に面する段丘崖となっている(図4)。遺跡は標高260~270mの平坦面に形成され、その広がりは東西約150m、南北約300mで、面積は約48,000㎡に及び、白石川に面する段丘の比高は約10mを測る。

小梁川遺跡の発掘調査は七ヶ宿ダム工事に伴って宮城県教育委員会により、1981年4~10月と1982年4~11月の2ヶ年にわたり実施され、『遺物包含層土器編』(相原ほか1986)、『縄文時代遺構編』(村田ほか1987)、『石器編』(相原ほか1988)の3冊の大部の発掘調査報告書が刊行されている。発掘調査では縄文時代早期末葉~中期中葉の遺構・遺物が検出されたが、主体となるのは前期末葉大木6式~中期中葉大木8b式までで、中期後葉大木9式以降は2km上流に位置する大梁川遺跡(図4)に主体を移したと推定される。

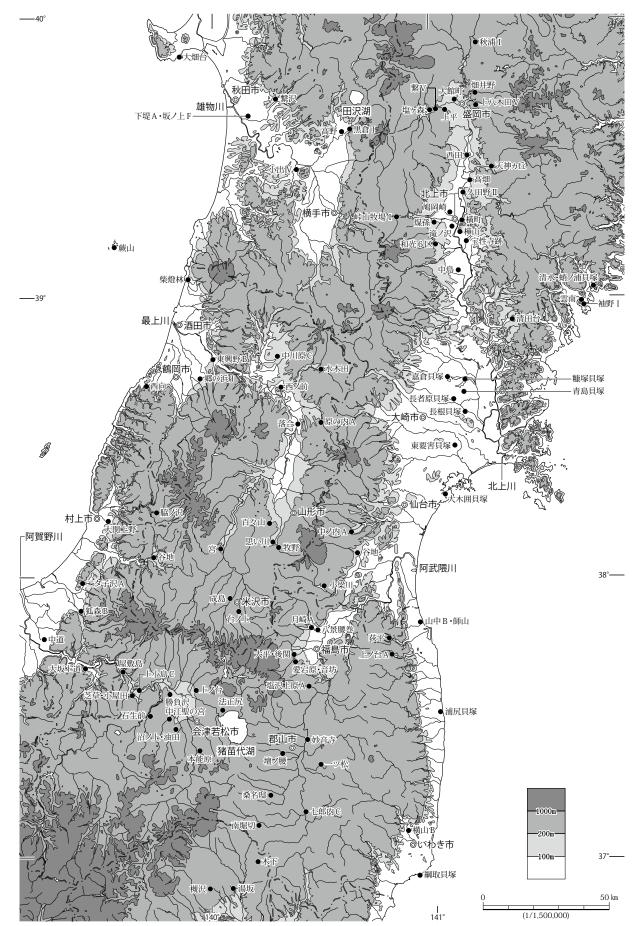


図1 東北中部・南部の縄文時代中期前葉(大木 7a ~ 7b 式)の主要遺跡

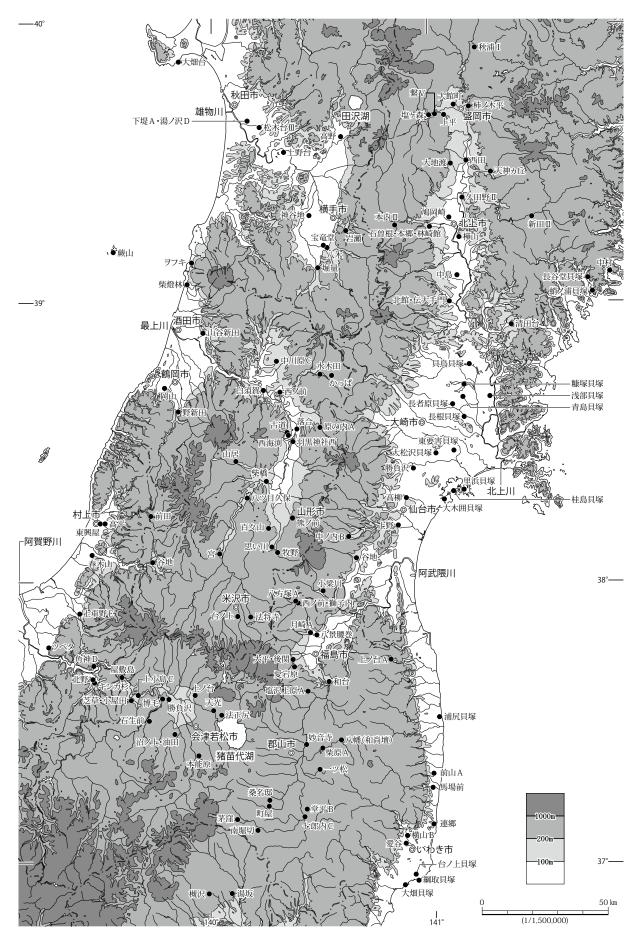


図2 東北中部・南部の縄文時代中期中葉(大木8a~8b式)の主要遺跡

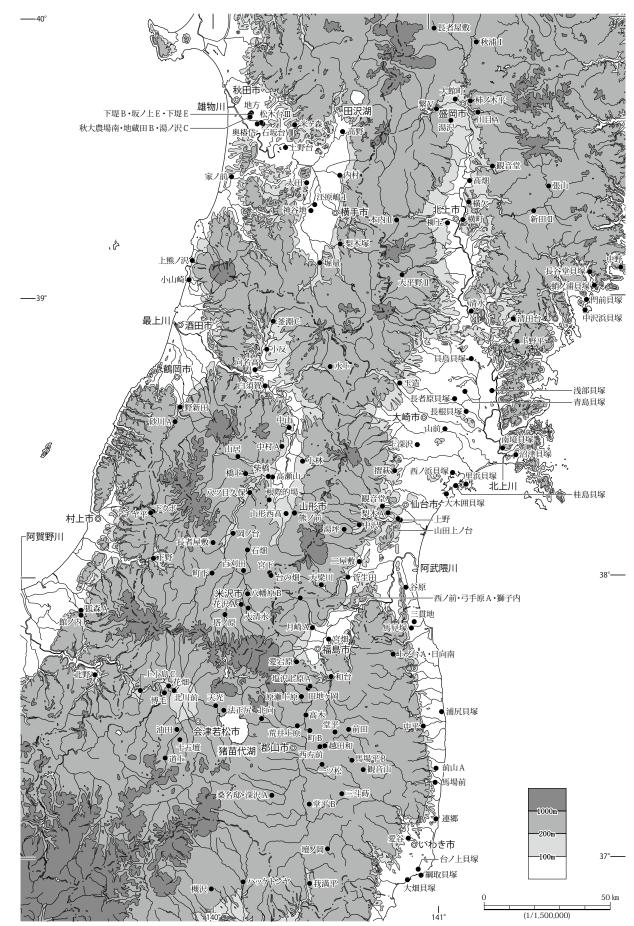


図3 東北中部・南部の縄文時代中期後葉(大木9~10式)の主要遺跡

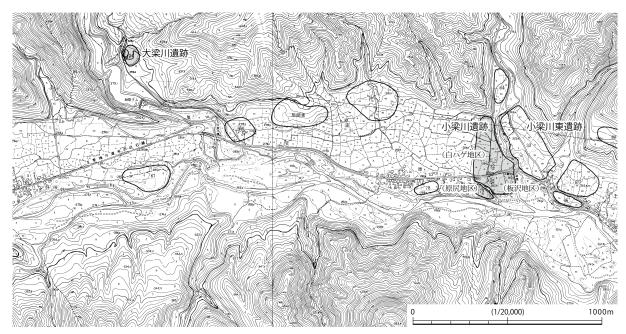


図4 宮城県七ヶ宿町小梁川遺跡・大梁川遺跡位置図

# (2) 小梁川遺跡の集落構成

小梁川遺跡は、白ハゲ・原尻・板沢の三つの地区から構成される。国道113号の北側が白ハゲ地区、南側のうち東方が板沢地区、西方が原尻地区 (駐2) で、後二者の間に幅20m程度の谷 (盗人沢) が介在する (図5)。縄文時代前期末葉 (大木6式) ~中期中葉 (大木8b (古)式)の集落は南東側の板沢地区に形成されており、それ以前の早期末葉~前期初頭は原尻地区と白ハゲ地区、前期前葉は板沢地区に主体があり、後続する中期中葉 (大木8b (新)式)には板沢地区から白ハゲ地区に主体が移り、集落跡としての終焉を迎えている。小梁川遺跡で検出された縄文時代の遺構は、竪穴住居跡35棟、焼け面を囲むピット群6基、土坑800基以上(フラスコ状土坑197基)、埋設土器遺構30基、墓壙8基、配石遺構2基、遺物包含層2ヶ所である。

集落の主体である板沢地区は、南西方向に張り出した東西約100m、南北約120mの舌状の段丘面で、標高261~262mを測り、東側は小梁川、南側は白石川、西側は盗人沢に画される(図5)。遺構の広がりを見ると、舌状の平坦面の大半を占め、直径約90mの環状集落の様相を呈している。中央のDC75区付近から261mのコンターラインにかけた径約20mの範囲の遺構密度が希薄で、その外周を土坑と竪穴住居跡が取り囲むが、南側の崖線付近の遺構も少なくなっており、三方を囲む構成となる。また埋葬に関わる墓壙と埋設土器は居住帯よりも内側に散在するが、墓域が特定の区域に集中する傾向は認められない。

板沢地区の集落は、遺構の分布状況から南北の DE 列を基準に東群と西群に大別され、更に東群は東西の75列を基準に南群と北群に区分される。従って集落は三つの区域に大別され、「北東群」、「南東群」、「西群」と呼称する。また西群は境界が不明瞭であるが、75列で「北西群」と「南西群」に分割されると考えられる。

竪穴住居跡 板沢地区と原尻地区では、縄文時代の竪穴住居跡が29棟検出されたが、その内訳は早期末葉1棟、前期前葉10棟 (計3)、Ⅱ期 (中期初頭) 3棟、Ⅲ期 (中期初頭) 1棟、Ⅴ期 (中期前葉) 3棟、Ⅵ期 (中期中葉) 5棟、Ⅷ期 (中期中葉) 2棟、時期不明4棟で、早期末葉と前期前葉を除く18棟は縄文中期の住居跡に該当する。その中には長軸が15m前後の大型竪穴住居跡が2棟含まれる。主軸を集落の中心に向けて北東群に並列して存するが、時期が明確なのは46号住居跡 (Ⅱ期) のみで、58号住居跡は近似した時期と推定されるものの、出土した土器は極僅かで、時期の特定は困難である。竪穴住居跡は西群 (9棟) に集中し、北東群は大型竪穴住居跡、南東群は大木7b式 (Ⅴ期) 1棟と大木8b (古)式 (Ⅷ期) 2棟で構成されており、居住施設は西側に偏在していたことになる。また住居に関連した遺構として、焼け面を囲むピット群が6基検出されている。いずれも西側の居住帯に分布し、時期の特定は困難であるが、地床炉を有した竪穴住居の痕跡と推定される。

フラスコ状土坑 板沢地区と原尻地区では、貯蔵施設と見られるフラスコ状土坑が197基検出された。前者が172

基、後者が25基で、その内時期が特定されたのは半数に満たない88基で、内訳は I 期27基、Ⅱ 期 8 基、Ⅲ 期 5 期、Ⅱ or Ⅲ 期 3 基、Ⅳ 期22基、Ⅴ 期17基、Ⅵ 期 3 基、 Ⅲ 期 3 基で、大木 6 ~7b 式が大半を占めており、大木8a 式と同8b 式を合わせても 6 基に過ぎない。大木 6 式のフラスコ状土坑が北東群に多く分布するのに対し、それ以降は南東群に集中するが、該域にも大木 6 式期の土坑が認められる。区域別では北東群が42基、南東群が62基、南西群が39基、北西群が29基で、南東群の数量が突出しており、特に CO ~ DB・65~72区の24m四方の範囲に44基の土坑が集中する。また大半の堆積土は自然堆積と思われるが、南東群には人為的に埋め戻された形跡のあるフラスコ状土坑が多く認められる。原尻地区のフラスコ状土坑は南東に延びる尾根上に並列するが、時期が特定された土坑は僅か 1 基(Ⅲ期)しかない。

土器埋設遺構 板沢地区と原尻地区では、土器埋設遺構が30基検出された。前者が29基(19号埋設土器の位置は不明)、後者が1基で、大半の土器が横位に埋設されており、底部を欠いた例が多数認められた。埋設施設の一形態と考えられ、遺構の中でも中央寄りに位置するものが多く、I期4基、Ⅱ期1基、Ⅲ期1基、Ⅳ期1基、Ⅴ期15基、Ⅴ m V 期1基、Ⅳ期4基、時期不明2基で、大木7b(新)式が半数を占めている。土器埋設遺構は一般に子供を埋葬した土器棺墓として、母胎回帰の観点から再生を祈った施設と理解されており、日常生活で使用された土器が転用された例が多いが、二次的な加熱の痕跡を持たない、口径50cm超、現存高60cm超の大型の優品(図9-91)も存している。

**墓** 壙 墓壙は人為的に埋め戻され、埋葬時に添えられたと思われる遺物を出土した楕円形・円形の土坑で、8 基検出された。中央部に4基、北東群・南東群・北西群・南西群に各1基ずつ分布しており、1~5号墓壙は伴った土器(2~4号墓壙は浅鉢形土器)から大木7b~8a式に比定されている。時期の特定が困難な6~8号墓壙からは、耳栓が出土している。

その他の土坑 板沢地区では所属時期の確認された土坑が65基存する。その内訳は I 期27基、 II 期5基、 II 期6 基、 IV ~ V 期11基、 VI 期10基、 WI 期4基で、大木6~8a 式に主体がある。円形や楕円形を基調とし、フラスコ 状土坑よりも小規模で、全体的に散在するが、その中には貯蔵穴や土坑墓と思われるものも含まれるであろう。

#### (3) 小梁川遺跡の遺物包含層

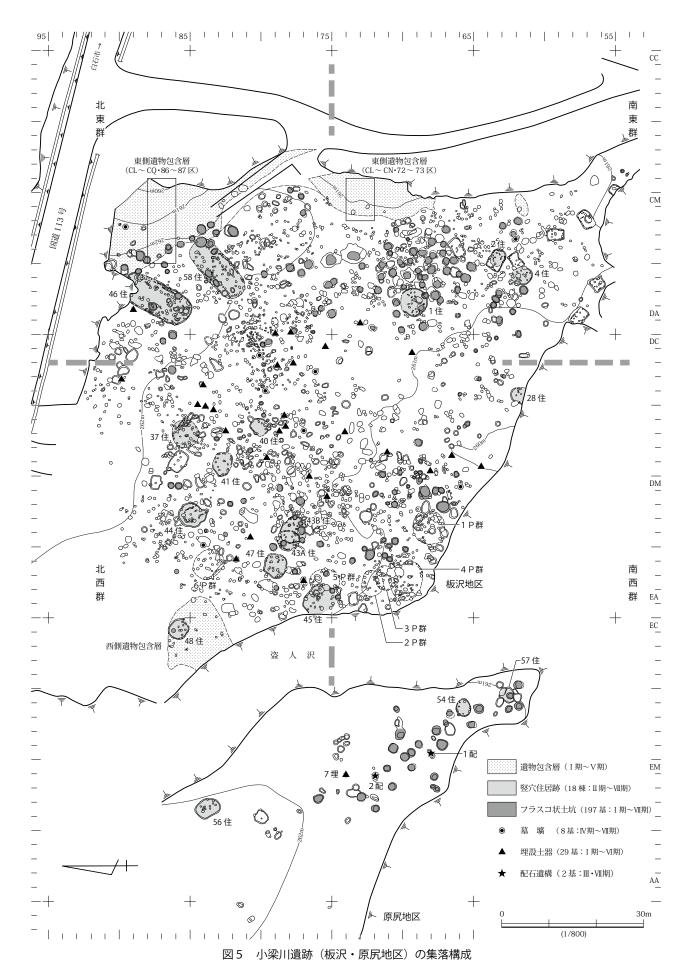
小梁川遺跡の東縁の段丘面から段丘崖部分の CM67区から CO ~ CR90区にかけて、大規模な捨て場跡である「東側遺物包含層」が検出された。南北約70m、東西約15m、最大層厚は約120cmを測り、最も分層された CL72区の細別層位は10枚を数えた。集落の北東群と南東群の外縁に跨がり、包含層は更に広がっていたと推定されるが、北側は国道113号、東側は砂利採取施設によって削平されており、また包含層の中央部は白石川へ通じる道路によって削平され、北側と南側に分断されていた(図5)。

包含層は主にシルト質の暗褐色〜黒褐色土で構成され、廃棄された礫と共に多量の人工遺物が出土したが、シカやイノシシの焼骨等の自然遺物も含まれていた。土器は前期末葉大木6式〜中期前葉大木7b式が出土し、土器以外の人工遺物としては円盤状土製品、土偶、三脚形土製品等の土製品、石鏃、石匙、石錐、石篦、石斧、石皿、磨石、凹石等の石器類が出土した。

調査は3 m四方のグリッドを基本として、各グリッドの堆積層を分層して調査されたが、特に良好な堆積が確認されたのは、北側の  $CL \sim CQ \cdot 86 \sim 87$ 区と南側の  $CL \sim CN \cdot 72 \sim 73$ 区(図 5)であった。層位は上位より第 I 層~第 V 層の 5 枚に大別され、大木 6 ~ 7 b 式にかけて 5 段階にわたる変遷過程が層位的に跡づけられ、出土 土器は以下に示したように 5 つの土器群に対比された  $^{(i\pm 4)}$ 。 なお当該期研究をリードする今村啓爾氏は、小梁 川遺跡について「量的に多い前後の時期に挟まれて五領ヶ台 II a, II b, II c, 竹ノ下式並行期が極端に少ない」(今村2010:367頁)と評価しているが、以下の II 期と II 期の土器が該当する。

板沢地区では遺物包含層以外に、Ⅵ期(大木8a 式)の竪穴住居跡 5 棟とⅧ期(大木8b(古)式)の竪穴住居跡 2 棟が検出され、白ハゲ地区ではⅧ期(大木8b(新)式)の竪穴住居跡 5 棟が検出されている。従って小梁川遺跡の出土土器は計 8 つの時期に分類されているが、層位的な上下関係が判明したのは、前半期の I ~ V 期に限られる。なおⅧ期は主体が白ハゲ地区に移行している。

また板沢地区の西端の平坦面でも、小規模な遺物包含層が検出されている(西側遺物包含層)。南北約14m、東西約14m、最大層厚は約20cmを測り、にぶい黄褐色を呈した1枚の層位を確認した。縄文前期前葉~中期中葉(大木8b 式)までの土器が出土したが、主体をなしたのはⅢ~Ⅳ期である。



## (4) 小 結

集落中央部の遺構が希薄な分布状況から、環状集落に近い構成と判断される。報告書では「求心的な集落構造」 (村田ほか1987:470頁)と総括され、環状集落とは断言していない。谷口康浩氏の定義では、環状集落は「中央に広場があり、その周囲に住居が配列された形の集落」で、「住居群に囲まれた中央広場に集団墓地が計画的に造営される点」が重要な特徴となっており、「重帯構造」と「分節構造」の二つの基本的構造が認められる。重帯構造は広場を中心として各種の建物や施設を同心円状の所定の圏内に配置するもので、分節構造は環状集落の内部を直線的に区分する構造を指す(谷口2005:4-6頁)。

小梁川遺跡では中心に遺構が希薄なエリアが存し、埋葬施設が中心寄りに散在するが、集団墓地が造営された 状況は確認できず、重帯構造が明瞭とは認めがたい。一方南東群にフラスコ状土坑が集中し、大型竪穴住居跡は 北東群、居住域は西群といった遺構分布の偏在が見られ、集落内の分割が可能であることから、分節構造は適合 されよう。但し大木6~8b 式の長期間にわたり累積した集落形成の結果であり、集落を構成した集団の内部の 関係を反映しているとは必ずしも言い切れない。遺物包含層の形成やフラスコ状土坑の状況から、集落の主体は 大木6~7b 式であったと考えられる。しかしその期間の住居跡は総数で6棟に過ぎず、それ以降の大木8a・8b 式の方が7棟と多くなっており、住居棟数から環状集落と決することは躊躇せざるを得ない。また南側は白石川 の段丘崖で削平を受けたため、遺構が消失し少なくなっている可能性も否定できない。

#### 3. 大梁川遺跡の概要

#### (1) 大梁川遺跡の立地と調査の経緯

大梁川遺跡は七ヶ宿町字若林地内、大梁川左岸の南西向きの丘陵緩斜面(標高306~310m)に立地する。白石川との合流点の約1.2km上流で、前記した小梁川遺跡から約2km北西方に位置し、遺跡の規模は約4,000㎡と小梁川遺跡より小規模である(図4)。遺跡の北側は東西方向に走る狭い沢が入り、南側も括れているため、全体としては西側の大梁川に向かって舌状に張り出しており、住居跡は平坦面から緩斜面に移行する地点に馬蹄形に構築されていた(図6)。

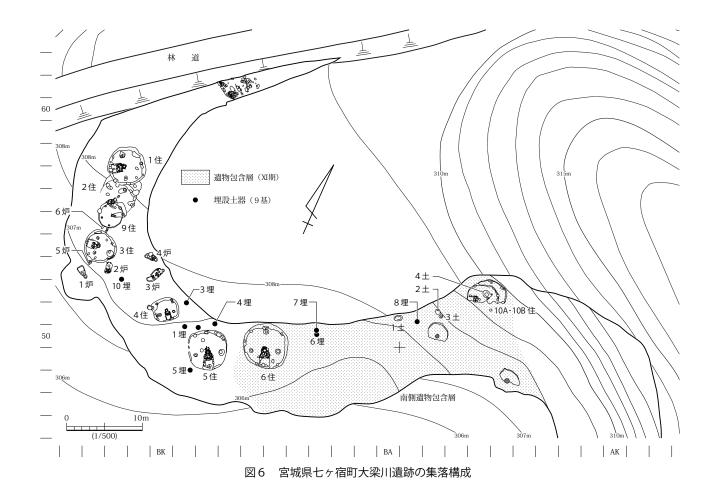
大梁川遺跡の発掘調査は七ヶ宿ダム工事に係る林道付け替え工事に伴って宮城県教育委員会により、1984年4~7月に実施され、小梁川遺跡の『石器編』と合わせた大部の発掘調査報告書(相原ほか1988)が刊行されている。調査では縄文時代中期後葉~後期初頭の遺構・遺物が検出されたが、主体となるのは中期後葉大木9(古)式~中期末葉同10(新)式までで、小梁川遺跡を引き継ぐように大木9(古)式期に忽然と集落形成が開始された。

#### (2) 大梁川遺跡の集落構成

大梁川遺跡では南北約80m、東西約50mの範囲に馬蹄形の集落が営まれており、竪穴住居跡11棟(大木10(古)式9棟、後期初頭2棟)、敷石住居跡1棟(後期初頭)、炉跡6基(大木9(新)式2基、同10(古)式1基、不明3基)、土器埋設遺構9基(大木10(古)式7基、同10(新)式1基、不明1基)、土坑4基(大木10(古)式1基、同10(新)式3基)が検出され、大半を大木10(古)式期が占めていた。また調査区の南側には大木9(古)式~同10(新)式の捨て場跡(南側遺物包含層)が形成され、小梁川遺跡と合わせると土器型式のスムーズな変遷を辿ることができる。

調査区は林道工事に伴うため、舌状丘陵の先端を縁取るように10~14m幅のU字形を呈するが、約1,000㎡の狭長な調査区で竪穴住居跡が11棟検出された。その配置状況から馬蹄形の集落と推測されるが、平坦面である集落中央部は未調査のため墓域の存在は確認できない。その他に炉跡や土器埋設遺構、土坑も検出されたが、フラスコ状土坑等の貯蔵施設は検出されていない。

竪穴住居跡 竪穴住居跡は舌状丘陵の側縁に沿って構築されており、9棟が大木10(古)式に比定される。その内 5棟(2号住→1号住/2号住→9号住/10A号住→10B号住)が住居同士で重複し、6棟(1・3・4~6・9号住)が完全な形を留めており、分布状況から東側(10A・10B号住)、南側(4~6号住)、西側(1~3・9号住)の3ヶ所のまとまりとして捉えられることができる(図 6)。いずれも複式炉を有する円形基調のプランで、規模は径3.2~5.9mの範囲にあり、4~5 mが主体となる。柱穴の配置では主柱3本と補助柱で構成される「3本柱構造住居跡」(1・2・5・6号住)が特徴的で、主柱2本と補助柱のタイプ(3・4号住)、主柱4本のタイプ(9号住)も存し、9・10A号住居跡を除く7棟の壁際に周溝が巡らされていた。



複式炉は10A 号住を除く 8 棟で検出されたが、いずれも土器埋設部・石組部・前庭部から構成された「上原型複式炉」で、構築方向に企画性は認められない。炉の大きさは住居跡のほぼ半径に相当し、土器埋設部の先端がほぼ住居の中心に当たり、端部が壁際に接する。埋設された土器は1 点が 6 棟( $1\cdot3\cdot4\cdot6\cdot9\cdot10B$  号住)、2 点の住居が 2 棟( $2\cdot5$  号住)で、土器は底部または口縁部を欠いており、1 号住居跡は炉が改修されたためか 2 点の土器が重なって出土した。また竪穴住居跡以外に炉跡が 6 基検出された。その内 4 基が複式炉で、大木 9 (新)式( $2\cdot3$  号炉)と同10 (古)式(4 号炉)に比定され、南側と西側の間にまとまっており、複式炉を有した竪穴住居の痕跡と推定される。

土器埋設遺構 埋葬施設の一形態と考えられ、9基検出されたが、時期が特定されたのは8基で、大木10(古)式が7基( $1\cdot 4\sim 8\cdot 10$ 号埋設土器)、同10(新)式が1基(3号埋設土器)である。掘方の形状は円形あるいは楕円形で、器高 $30\sim 35$ cmの装飾された深鉢形土器が正位の状態で埋設され、大半が底部を有していた。

土 坑 調査区の東側で 4 基の土坑が検出されたが、いずれも土器が出土しており、大木10(古)式(3 号土坑)と同10(新)式( $1\cdot 2\cdot 4$  号土坑)に位置づけられる。中でも 1 号土坑(口径 $110\times 70$ cm、深さ20cm)では、底面から完形土器(図11-209)が出土しており、形状や規模から土坑墓の可能性が考えられる。

#### (3) 大梁川遺跡の遺物包含層

大梁川遺跡の南側遺物包含層は、南西方向に舌状に張り出した調査区南側の括れ付近に東西約44m、南北約12 mの範囲(AN  $\sim$  BJ  $\cdot$  47 $\sim$ 52区)で形成された大規模な捨て場跡である(図 6)。面積は約550㎡を測り、南北の範囲は調査区より更に広がっており、最大層厚は約60cmで、最も分層された BA50区の細別層位は7枚を数えた。東側住居群と南側住居群の間に小さな沢が入り込み遺構が希薄となるが、その窪みに包含層が10度程度の傾斜を以て堆積しており、第 I  $\sim$  IV層の 4 枚の層位に大別されている。

包含層は主にシルトで構成され、巨視的には下位から黒色→黄色→黒色→黄色と互層をなして、南方向に張り出すように堆積し、最上位の第 I 層が南側遺物包含層全体を覆っていた。最下位の第 IV 層は人頭大の礫を含む黒褐色土層で、北側の比較的高い地区に分布しており、最大厚は約30cmを測り、2~3枚に細別され、大木9(古)

式(X期)の土器が主体的に出土した。第 II 層は暗褐色~黒褐色土層で、最大層厚は約40cmを測り、2~4枚に細別され、大木9(新)式(X期)の土器が主体的に出土した。第 II 層は小礫を比較的多く含む暗褐色~黒褐色土層で、最大層厚は約50cmを測り、2~4枚に細別され、大木10(古)式(XI期)の土器が主体的に出土した。第 I 層は褐色~暗褐色土層で2枚に細別され、大木10(新)式(XI期)の土器が主体的に出土した。

#### (4) 小 結

大梁川遺跡は舌状丘陵の縁辺に沿って馬蹄形の住居の配置が認められた。9棟のいずれも大木10(古)式に比定されるが、住居同士の重複もあり、同時併存は最大で7棟と見積もられる。その他に当該期では竪穴住居の痕跡である炉跡が1基、土器埋設遺構7基、土坑1基が検出され、遺構数からは集落のピークにあったことが窺える。その前後の時期では、先行する大木9(新)式が炉跡2基のみ、後続する大木10(新)式が土器埋設遺構1基と土坑3基のみ、集落開始期に当たる大木9(古)式の遺構は皆無と、年代的偏向が著しい。南側遺物包含層が大木9(古)式~同10(新)式まで連綿と形成された点を考慮に入れると、舌状丘陵の外縁部や内側の未調査区域に、前後する時期の居住施設が存した可能性も否定できない。

# 4. 小梁川・大梁川遺跡出土土器による時期区分

#### (1) I期(大木6式1~4期)の土器

I期は小梁川遺跡の東側遺物包含層第V層から出土した土器が主体で、報告書では小梁川遺跡第I群土器として前期末葉に位置づけられ、同層準は南側の  $CL\sim CN\cdot72\sim73$ 区で1枚、北側の  $CL\sim CQ\cdot86\sim87$ 区では最大 3 枚( $a\sim c$  層)に細分された。今村啓爾氏の5 細分編年(今村2010)の大木6式1期~4期の土器に該当し、詳細は別稿(小林2016)で考察したが、同遺跡では先行する大木5b 式の土器は認められず、同6式1期になって忽然と集落の形成が始まったことになる。

I期の土器のうち図7-1・2が大木6式1期、3~9が同2期、10~14が同3期、15・16が同4期に位置づけられる。大木6式は長胴形と球胴形の土器を主体に構成されるが、この区分は大木6式の成立した時期ではそれ程明瞭でなく、2期以降に分化が進行した。長胴形は頸部の括れた胴部の長い深鉢形土器で、口縁部・頸部・胴部の三つの文様帯を有した例(9・11・12・16)、胴部文様帯を欠いた例(6・8・13)、頸部と胴部文様帯を欠いた例(7)の三様が見られる。球胴形は外反する口縁部、球状に膨らむ胴部、円筒形の台状部の3段からなる器形で、結節浮線文、ソーメン状浮線文、結節沈線文等の文様表現で飾られたものが多く、特に3期に「浮線文系球胴形土器」(14)が発達する。15は報告書で第Ⅱ群土器に分類されたが、口縁部に渦巻き状の突起を配し、括れ部下端にかけて「く」字状の短沈線文が繰り返されることから、筆者は大木6式4期に位置づけた(小林2016)。

# (2) Ⅱ期(大木6式5期~五領ヶ台Ⅱ式並行期)の土器

Ⅱ期は小梁川遺跡の東側遺物包含層第Ⅳ層・第Ⅳ層上面から出土した土器が主体で、報告書では小梁川遺跡第 Ⅱ群土器として中期初頭に位置づけられ、同層準は南側の CL ~ CN・72~73区で1枚確認された。今村氏の編年研究の大木6式5期~五領ヶ台Ⅱ式並行期まで含まれるが、前記したように五領ヶ台Ⅱ b・Ⅱ c 式並行期の土器は判然としない。

Ⅱ期の土器のうち図7-17~23が大木6式5期、27・28が五領ヶ台 I a 式並行期、30・31が同 I b 式並行期、32・33が同 II a 式並行期に位置づけられ、24~26はこれ等に伴った「糠塚系統」土器である。大木6式5期は先行型式までの長胴形と球胴形の文様上の区分がなくなり、胴部が球状に膨らむかどうかの区分となり、胴部には縦方向の縄文が施され、羽状に組まれたり、両端に結節回転文が加えられる。文様は口縁部に集約され、浮線を2本平行に貼り付けて文様を描き、その2本を短い浮線で梯子形に繋いだ梯子形文様やドーナツ形貼付文に刻みを入れた文様が認められる。続く五領ヶ台 I a 式並行期は浮線文による表現が沈線文に置き換えられ、短沈線を並べた梯子形の文様図形を特徴とする。同 I b 式並行期は口縁部文様の簡略化が進み、幅狭の文様帯をもった円筒形(30・31)が目に付くが、東北では同式の指標となる細線文が普及しておらず、I a 式並行期との区分は必ずしも明確でない。同 II a 式並行期の土器は極僅かとなるが、原尻地区では当該型式の住居跡(56号住居跡)が検出され、32(床直上)と33(床面)が出土した。同式は口唇部の刻みと口唇外面の縄文帯及び沈線に沿う刺突文を特徴とするが、33は縄文帯を欠くが、口唇部が細かく刻まれ、括れ部の水平の複合鋸歯文の上下を区切る

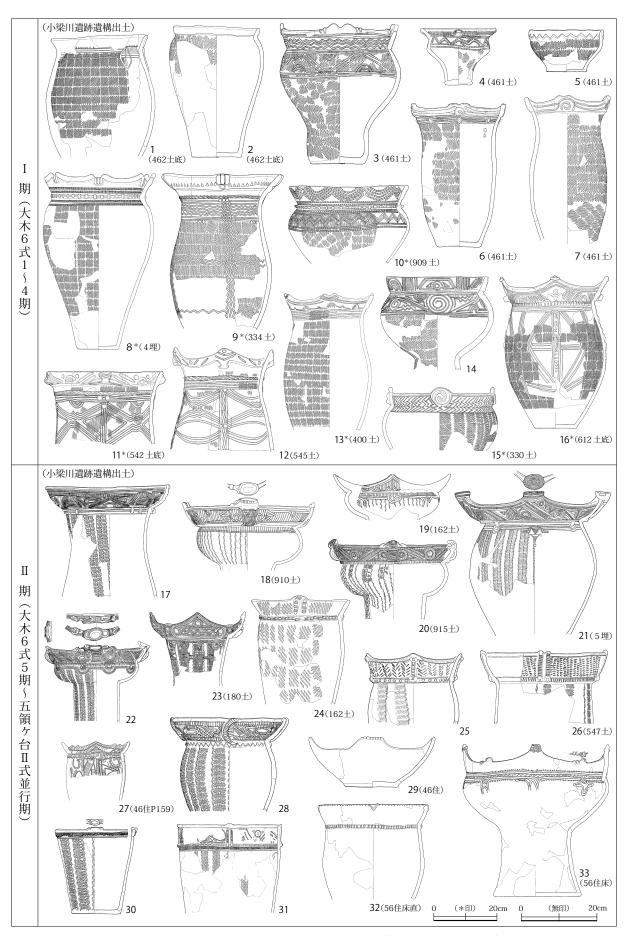


図7 小梁川遺跡・大梁川遺跡出土の縄文時代前期末葉~中期末葉の土器(1)

平行沈線文に沿って刺突列が加えられ、同式の特徴を具備している。

上記した装飾を持った土器に伴って、在地系の「糠塚系統」土器が出土する。同系統は口縁部を水平線で数段に区分し、その各段に縦の沈線を並べて挿入し、胴部を削り取ったような無文または縦方向の羽状縄文になるもので、大木6式5期(図7-24)に登場し、五領ヶ台 I 式並行期(25・26)に続き、同 II a 式並行期には文様が単純化し、口縁部や口縁の折り返し部に縄文を加えたものが多くなる(今村2010:362-363頁)。更に少量ではあるが、折返し口縁を有した縄文施文の「下小野系粗製土器」に類似した土器(今村2010:126-141頁)も出土している。

#### (3) Ⅲ期(大木7a(新)式·竹ノ下式並行期)の土器

Ⅲ期は小梁川遺跡の東側遺物包含層第Ⅲ層から出土した土器が主体で、報告書では小梁川遺跡第Ⅲ群土器として大木7a式の範疇に含められた。同層準は南側のCL ~ CN・72~73区で最大 5 枚 (a~e層)、北側のCL ~ CQ・86~87区で最大 2 枚 (a · b層) に細分され、また西側遺物包含層にも資料がまとまっている。

竹ノ下式は五領ヶ台式を母体とし、阿玉台式へ変わって行く過程の東関東の型式(今村2010:82頁)で、阿玉台式直前型式として並行するのは大木7a 式の新しい部分である。本稿では便宜的に「大木7a (新) 式」と呼称し、中ノ内A遺跡第 I 群土器(相原ほか1987)に対比したが、この時期から非常に大型の土器が増加する。 4 単位の大きな富士山形の口縁(截頭波状口縁)を有した器形(図8-36・38~43)や、口縁部の幅(高さ)が狭く胴部が樽形に膨らんだ器形の深鉢形土器(45~49)が特徴的で、前者は波頂下の数本の縦線や口縁に沿った弧線を中心に区画文が展開するが、波頂下の渦巻きは顕著でない。後者では胴部に隆起線による半円形の区画を有し、隆起線に沈線が沿い、複合鋸歯文(交互の刺突)列が沿うもの(44)もある。胴部文様は縄文地文が施されており、下限が水平に区画されるもの(44・49)と区画されないもの(45~48)が見られるが、後者の方が卓越する。括れを持つ器形では、括れ部に4単位の細長い楕円形区画が作出され、交点部分にX字状の貼付文が配される(34・37・44・46)が、円形貼付文を挟む例(45)も見られ、円筒形の胴部の上に内彎する口縁部のついたキャリパー形の器形(34)も現出する。截頭波状口縁の波頂部は縦に刻まれたもの(35・36・39・40・42)が多く、38の波頂部は「U」字状の装飾、41は三角頭の装飾、43は獣面突起風の装飾で小さな橋状把手が配される。また口縁部の円弧状突起の内・外面には、粘土紐や沈線による「の」字状や弧状の装飾が認められる(44・48・49)。43の口縁部と胴部の文様は、隆起線に沿って押引き文が施され、口縁部に2本一組の押引き文による三角形区画が作出される。

深鉢形土器の他に浅鉢形土器も多く存するが、中ノ内A遺跡に特徴的な大きな截頭波状口縁の浅鉢は明確でない。50の口縁部には4単位の口縁部突起に対応した楕円形区画文が見られ、51は交互刺突文が巡らされる。また文様が簡素な粗製の傾向の土器として、折返し口縁や口縁部に撚糸圧痕を水平に多数並行して加えた「下小野系粗製土器」に類似した土器も多数認められる。なお小梁川遺跡の北方約25kmの中ノ内A遺跡には「かなりの数の竹ノ下式をともなっており」(今村2010:375頁)、北方約86kmの山形県水木田遺跡にも同式が認められている。しかし小梁川遺跡では竹ノ下式に相当する土器を抽出することができない。

#### (4) N期(大木7b(古)式期)の土器

Ⅳ期は小梁川遺跡の東側遺物包含層第Ⅱ層から出土した土器が主体で、報告書では小梁川遺跡第Ⅳ群土器として、大木7b式の古い部分に位置づけられ、同層準は北側のCL~CQ・86~87区では最大6枚(a~f層)に細分された。阿玉台 I a式が並行関係にあり、小梁川遺跡には「わずかであるが阿玉台 I a式類似の土器を伴っている」(今村2010:374頁)と指摘されており、本稿では便宜的に「大木7b(古)式」と呼称し、中ノ内A遺跡第 II 群土器(相原ほか1987)に対比した。隆起線に沿った撚糸圧痕による文様が特徴的で、複合鋸歯文は殆ど見られなくなるが、隆起線に沿う沈線や縄の側面圧痕は、阿玉台式の隆起線に沿う押引きと同じ意味を持つものと理解されている(今村2010:374頁)。

先行型式に特徴的な截頭波状口縁の土器は少なくなり、波頂部を低くした土器(図8-52・57)や、波頂部に装飾を貼付したり(53)、先端の尖った大波状口縁の土器(54・60)が認められる。胴部が樽形に膨らんだ器形も継続するが、胴部文様帯の下限が区画され、胴上部は縄文地文を欠いている。弧状区画文が多用され、「上と下から来る隆起線による弧が接し、菱形に残された余白の中に渦巻が加えられ」(今村2010:376頁)た例(63)が特徴的で、57の胴上部の三角形区画内には縄の側面圧痕による玉抱き三叉文が充填される。またキャリパー形

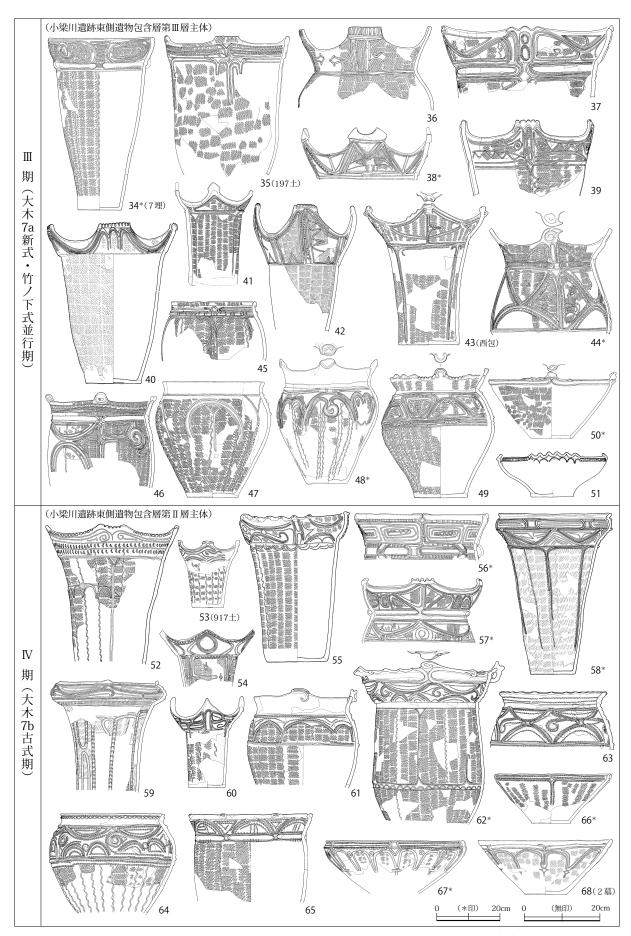


図8 小梁川遺跡・大梁川遺跡出土の縄文時代前期末葉~中期末葉の土器(2)

の器形 (55・58・59) が明確となり、内彎した口縁部の区画文に沿って縄の側面圧痕が加えられる。深鉢形土器は一般に文様単位数が増加しており、楕円形区画文が口縁部に進出し4単位以上となり、口端が短く外折したキャリパー形の58は、口縁部6単位、頸部7単位、胴部5単位と部位毎に異なった単位数で構成される。59は頸部に短い撚糸圧痕を縦に並列させ、胴部は縦分割を基本とした半截竹管による「U」字文で構成され、後続型式に顕在化する特徴の萌芽が認められる。

浅鉢形土器は平縁で、深鉢と同様に区画に沿って縄の側面圧痕が多用される。口縁部には4単位以上の楕円形区画文を有し、胴部には半截竹管(67)や撚糸圧痕(68)による連弧文が施される。また先行型式と同様に「下小野系粗製土器」に類似した土器や口縁に縄の押捺で文様を描く粗製傾向の土器(65)が伴っている。

#### (5) V期(大木7b(新)式期)の土器

V期は小梁川遺跡の東側遺物包含層第 I 層から出土した土器が主体で、報告書では小梁川遺跡第 V 群土器として大木7b 式の範疇に含められた。同層準は北側の東縁に形成され、主として CL86区・CL87区・CM87区から出土し、最大4枚(a~d層)に細分されたが、土器の出土数量は先行型式よりも少なく、当該型式を以て東側遺物包含層の形成は終了する。連弧・縦位の連続した撚糸圧痕や連弧状貼付文(刻目・側面圧痕有り)に特徴付けられ、大木8a 式への過渡的段階として阿玉台 II 式に対比され、本稿では便宜的に「大木7b(新)式」と呼称した。内彎気味に外傾した口縁部を乗せた深鉢形土器が顕著で、波状口縁の波頂部には装飾が発達し、橋状把手(図9-71・74)も認められる。口縁部文様は隆起線による区画文が配されるが、隆起線上に刻みや縦位の撚糸圧痕が加えられ、隆起線に沿って沈線や平行沈線が施される。胴部が樽形に膨らんだ器形(78・79・81・83)も継続するが、胴部が緩く内彎した長胴の器形が多くなり、樽形の器形では口縁部に鍔状に隆起線を巡らし、括れ部に橋状把手や突起を配した例(78・81・83)が見られる。深鉢形土器の胴部文様は縦分割を基本に、平行沈線(71)や隆起線による文様が胴下部まで展開するが、隆起線上に刻みや撚糸圧痕を加えた例(81)や縄文施文の例(79)、また胴部文様帯が多帯化した例(72・74・78・83)が見られ、胴部文様帯が発達するようになり、渦巻文や棘状の突出(81)といった後続型式の特徴の萌芽が認められる。

#### (6) VI期 (大木8a 式期) の土器

Ⅵ期は小梁川遺跡の東側遺物包含層の形成が終了し、遺構から出土した土器のみとなり、報告書では小梁川遺跡第Ⅵ群土器として、大木8a 式に位置づけられた。竪穴住居跡は5棟検出されたが、いずれも北西群に位置しており、北東群中心寄りの339号土坑(図9-92~95)が一括性の高い資料となっている。当該期の土器の出土数は極端に少なくなる。

頸部で括れた器形が顕著で、口縁部が外傾した器形や緩く内彎したキャリパー形が多く、胴部に最大径を持った広口壺の器形(88・93)や、括れを持たず口縁部が外反した円筒状の器形(98)も認められる。口縁部に橋状 把手等の立体的な装飾突起が発達し、浅く幅の広い沈線や低く扁平な隆起線(断面蒲鉾形)によって、方形や楕 円形の区画文や「S」字状文・渦巻文・連弧状文等が描出され、また縦位の撚糸圧痕や口縁部上位に連続刺突文 (刻目)等も認められる。胴部文様帯が発達するため、先行型式まで見られた結節回転文による「装飾的な縄文」は姿を消すが、羽状縄文や地文の縦位方向回転は継続する。

91は25号埋設土器で、現存高70cm弱を測り、文様帯の多帯化が著しい。口縁部に「S」字状の装飾性の強い橋 状把手を配し、胴部は側縁を沈線で縁取った低い隆起線で、末端が渦を巻く曲線文様と方形区画文が交互に5単 位展開する。また区画帯として刻みを加えた連弧状貼付文が配される。97は3条の細い沈線を基本として口縁部 に棘状突出を伴う波状文、胴部に末端が渦を巻く曲折文が展開する。

大木8a式は通常2期に細分されるが、本遺跡では先行型式に出現した要素(縦の撚糸圧痕・連弧状貼付文) を残す古段階が主体となっており、胴部文様が3条の沈線文様で構成された新段階は、97を指摘するに留まる。

## (7) VII期 (大木8b (古) 式期) の土器

Ⅲ期は報告書では小梁川遺跡第Ⅲ群土器として、大木8b式の古い部分に位置づけられた。続く大木8b(新)式(第 Ⅲ群土器) は白ハゲ地区に集落を移しており、板沢地区の最終段階に相当する。竪穴住居跡は南東群で2棟検出されたが、出土した土器は小片のみで、図9には北東群のV期の土坑である352号土坑(100・101)と、原尻地区の820号土坑(102)から出土した土器3点を図示した。

大木8b 式はキャリパー形の器形と棘状の突出を伴った渦巻文を特徴とする。図示した土器は胴部が緩く膨ら

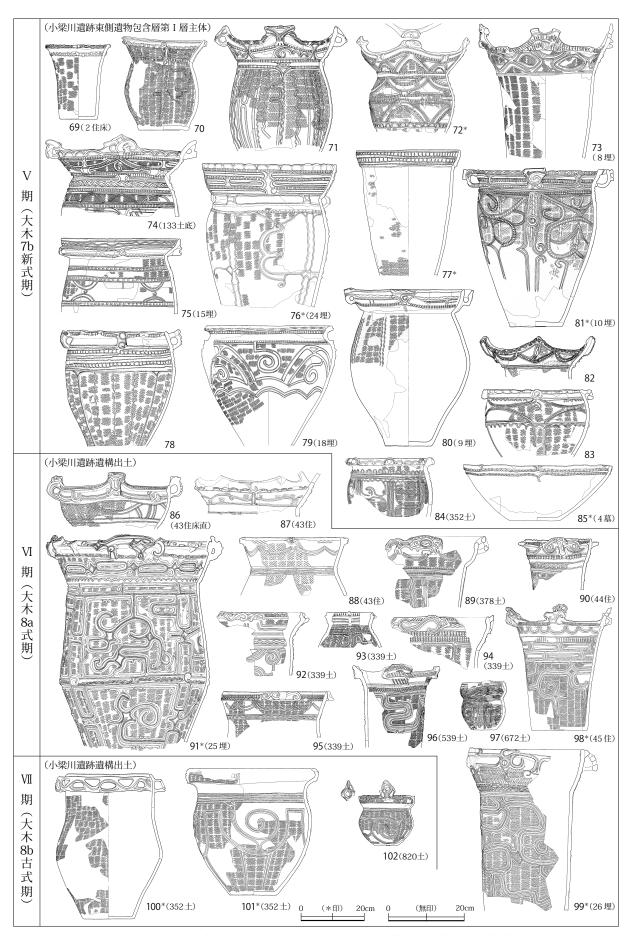


図9 小梁川遺跡・大梁川遺跡出土の縄文時代前期末葉~中期末の土器(3)

み口縁部が強く内彎したキャリパー形の器形(101・102)で、括れ部に無文帯を巡らし、口縁部と胴部の文様帯を区分する。無文帯直下の頸部文様帯には3~4条の平行沈線文を巡らし、口縁部文様帯は立体的な装飾や横位に伸びた渦巻文、胴部文様帯は2本一組の隆起線(101)または3条の沈線(102)で曲流する渦巻文が展開する。大木8b式は2~3期に細分されるが、両例は棘状の突出や小形の渦巻き文が顕著でなく、また文様帯の区分が明瞭であることから、同式の古い段階に比定される。

#### (8) W期 (大木8b (新) 式期) の土器

Ⅲ期は報告書では小梁川遺跡第Ⅲ群土器として、大木8b式の新しい部分に位置づけられた。これまでの板沢地区ではなく、北方へ180m以上離れた白ハゲ地区北側の南北50m、東西30mの範囲で、竪穴住居跡 5 棟(5・6・7・51・53号住)と土坑 1 基(254号土坑)が検出され、集落が移転したと見られている。住居跡 5 棟は直径 6 m以下の円形乃至は楕円形の小型住居で、周溝は持たず、石組炉(7・51・53号住)、袖部が付いた石組炉(6号住)、祖型的な複式炉(5号住)を有しており、概ね同一時期の所産とされている。

深鉢形土器は口縁部が内彎したキャリパー形の器形(図10-103・107・108・110)と、口縁部の外反した器形(105・109・111)が存しており、文様は隆起線と沈線を組み合わせた隆沈線や2~3本単位の沈線で構成され、口縁部は渦巻き文・楕円文が横方向に展開し、胴部文様は大形の渦巻き文と小形の渦巻き文が横方向に連結し、胴下部は単位性を持った懸垂文で構成される。沈線間には研磨調整が加えられ、隆沈線の断面も四角形・台形から三角形へと推移する。口縁部から胴下部にかけて全面を一つの文様帯とした例(103・109・110)も見られ、全体を取り巻く渦巻き文間に楕円形や不定形の小区画文が作出され、隙間のない繁縟な文様構成となり、直接区画内に縄文地文を充塡した例(103)も現れる。渦巻き文と小区画文の構成は後続する大木9(古)式にも認められるが、同8b(新)式では渦巻き文から延びた線が分岐して小区画文を作出するか、あるいは両者の分離が不明瞭であるのに対し、同9(古)式では明瞭に分離される(森2008:364頁)。

# (9) 区期 (大木9 (古)式)の土器

区期は大梁川遺跡の報告書で「大梁川第Ⅳ層土器」として、大木9式前半期に位置づけられた。同遺跡の南側遺物包含層の最下位である第Ⅳ層から出土した土器で、大木8b式を混在させない点で層位的な指標性を有している。

深鉢形土器はキャリパー形の器形(図10-112~114・116~121・129・133~135)と口縁部の外反した器形(115・122~127)が主体となるが、前者が若干上回り、横位に展開した口縁部文様帯が残存する。また括れを持たない器形(128)も僅かに見られる。文様は右巻きと左巻きの渦巻き文がC字形(稀にS字形)に連結した双頭渦文が特徴的で、隆線と沈線あるいは沈線単独で描出される。双頭渦文は不均衡な太描き部と細描き部からなり、後者の多くに縄文、刺突文、条線文が加えられる。一方太描きの渦巻き文は口端の円弧状突起と一体化した例(113~115・119)が認められる。胴部は縦長の文様構成で、沈線によって楕円文や「逆U」字文が描出され、磨消部と縄文部が明確に区分されるが、文様の間隙には凹円や縦位沈線文、ステッキ状沈線文も認められる。浅鉢形土器(鉢形土器を含む)は口縁部が内彎気味にほぼ直立乃至は外傾した器形(130~139)が多く、波状口縁の場合文様が深鉢形土器に共通する。深鉢形土器の地文は縄文が施文され、条線文や刺突文が一部併用され(114・117・119・122)、浅鉢形土器も縄文が卓越するが、条線文(132・139)も存する。

当該期に充塡による磨消縄文手法が顕在化する。 III期に沈線間を研磨する調整が現れ、それが徐々に拡大し、同時に隆帯の連結が進み、囲まれた領域が区画化する。そして当該期に至り、隆帯・沈線表現が徐々に欠落し、区画のみが顕在化したとして、従来のダイレクトに線で表現する手法から、区画による図像表現手法への転換が指摘されている(水沢2015:161-162頁)。

# (10) X期(大木9(新)式)の土器

X期は大梁川遺跡の報告書で「大梁川第Ⅲ層土器」として、大木9式後半期に位置づけられた。同遺跡の南側遺物包含層の第Ⅲ層から出土した土器で、下位の「第Ⅲ c ~ d 層」(図10-141~153) と上位の「第Ⅲ a ~ b 層」(154~159) に区分して提示されたが、後者の出土点数は少ない。

深鉢形土器はキャリパー形の器形と口縁部の外反した器形が存するが、平縁が大半を占め、第Ⅲ c ~ d 層では 前者が卓越するのに対し、第Ⅲ a ~ b 層では後者が主体で主客が逆転し、後続型式に継承される。文様の基本 形となるのは双頭渦文であるが、両端が均衡の取れた渦巻き文として表現され、渦巻き部に縄文も施文される。

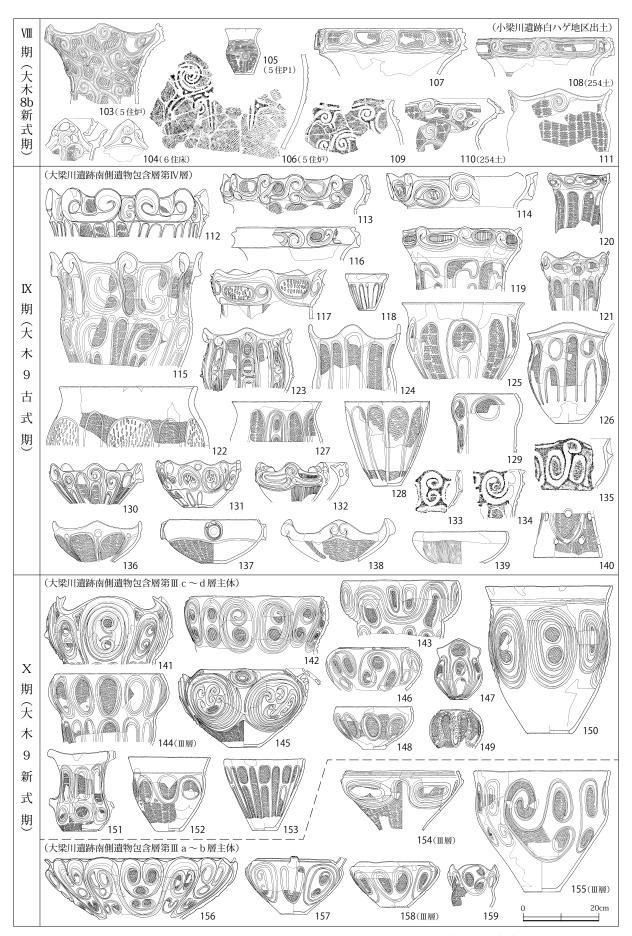


図 10 小梁川遺跡・大梁川遺跡出土の縄文時代前期末葉~中期末葉の土器 (4)

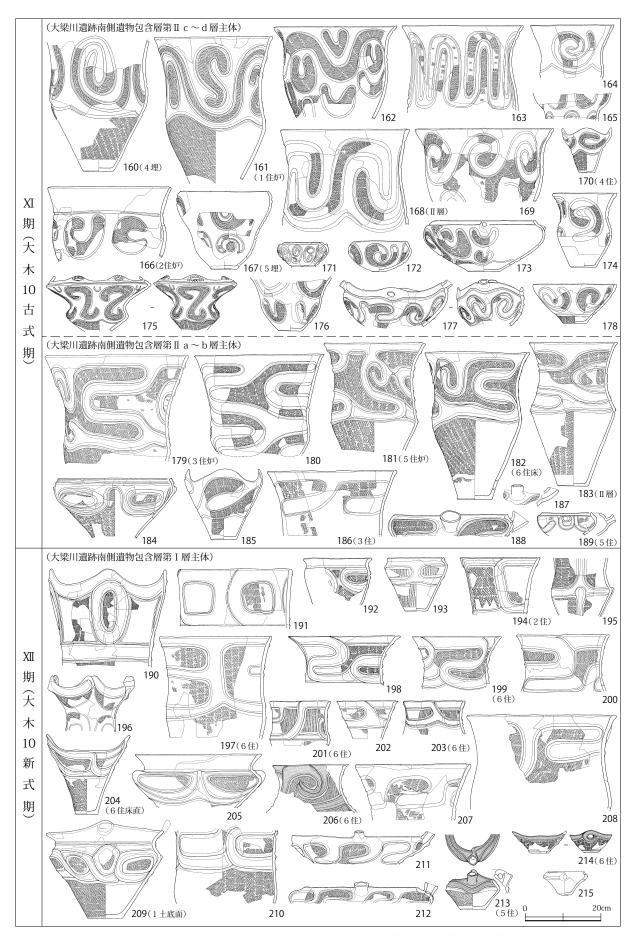


図 11 小梁川遺跡・大梁川遺跡出土の縄文時代前期末葉~中期末葉の土器 (5)

巨大な多重楕円文を設け、その内部に双頭渦文を配した例(141・142・145・150)も見られ、文様は主に太い沈線(凹線)で描出されるが、一部隆線も用いられる。また楕円文や「逆U」字文は沈線で描出され、文様間を巡る沈線も認められる。IX期まで見られた独立した口縁部文様帯は消失し、縦位に構成された胴部文様が口縁部に追り上がっており、括れ部を画して口縁部を無文にした例(150・152)も散見される。

浅鉢形土器は口縁部が直立した器形よりも、強く内彎した器形の方が優勢となる。また注口付きで見ると第 $\, \square \,$  層  $\, c \sim d \,$  層では円窓状乃至は渦巻き文の一部に組み込まれる(145)のに対し、第 $\, \square \,$  a  $\, \sim b \,$  層は全て円筒状の注口部(157)を持つ。

## (11) XI期 (大木10 (古)式) の土器

XI期は大梁川遺跡の報告書で「大梁川第Ⅱ層土器」として、大木10式前半期に位置づけられた。同遺跡の南側遺物包含層の第Ⅱ層から出土した土器で、下位の「第Ⅱ c~d層」(図11-160~178)と上位の「第Ⅱ a~b層」(179~189)に区分され、また当該期の竪穴住居跡が9棟検出されている。

#### (12) XII期 (大木10(新)式)の土器

Ⅲ期は大梁川遺跡の報告書で「大梁川第 I 層土器」として、大木10式後半期に位置づけられた。同遺跡の南側遺物包含層の第 I 層から出土した土器で、同層は包含層全体を覆うように堆積していたが、最上層のため包含層と認定しないで掘り下げており、土層断面の記録は一部に留まっている。また 6 号住居跡の埋土から、まとまった資料が得られている。

深鉢形土器(鉢形土器を含む)は外反した器形が大半を占めており、頸部が「く」字状に括れ、口縁部が短く外傾した器形(図11-205・209)も現れる。キャリパー形は姿を消し、口縁部が内彎し括れを持たない器形(190・193・196・204)も増加する。波状口縁の波頂部には捻転した橋状把手が配され、胴上部に楕円形区画文が施される(196)。平縁では方形区画文やS字に左傾した縄文帯(分節波濤文)が多用されるが、後者はZ字状の無文部が横位に連結することで描出される。これ等の文様は稜の明確な隆帯や隆沈線、沈線で描出され、無文部が主体と化すが、口縁部の起点や無文部の接点に貼付された「ヒレ状隆線」がその傍証となろう。浅鉢形土器は口縁部が内彎した器形が主体で、注口付きは円筒状のもので占められるが、6号住居跡埋土(4層)から、口縁部が外傾した器形で、口縁部の無文帯が波頂部の円窓を取り巻き朱彩された同形同大の浅鉢形土器(214)が3点出土している。

当該期の土器の多くには、一旦器面全体に縄文を施した後に沈線を引いて、無文部となるべき部分を磨り消す 磨消縄文手法が用いられる(池谷1988:80頁)。地文の回転方向(縦位)が一定であり、これまでの充填手法と は一線を画し後期に継承されるが、地文に撚糸文が採用されたことにも密接に関連するのであろう。但し充填 手法も認められており(198・199・206~208~210)、また当該期には朱彩された土器が顕在化する(206・213・ 214)。

# 5. まとめ

東北中部と南部の境界域の奥羽山系の山間に位置する小梁川遺跡と大梁川遺跡から出土した土器の年代的変遷を概観してきた。検出された遺構や出土した土器の数量から、小梁川遺跡は大木7b 式期( $\mathbb{N} \sim \mathbb{N}$ 期)に集落としてのピークを迎えたと想定されるが、同遺跡では $\mathbb{I}$  期から $\mathbb{I}$  期にかけて衰退した時期(五領ヶ台 $\mathbb{I}$  b  $\sim \mathbb{I}$  c 式並行期)が存していた。また大木8a  $\sim$ 8b 式期( $\mathbb{N} \sim \mathbb{N}$ 期)は小梁川遺跡に遺物包含層は形成されず、遺物量が極端に減少しており、大木8b(新)式( $\mathbb{N}$ 期)はこれまでの板沢地区から白ハゲ地区に集落を移転した。従前の規模での集団の維持が困難になる状況が生じ、続く大木9式期には沢を違えた大梁川遺跡へ集落を移したと推定される。

2㎞離れた大梁川遺跡では、大木9(古)式(IX期)~同10(新)式(IXI期)までの大規模な遺物包含層が形成された。住居跡は大木10(古)式(IXI期)にほぼ限定されることから、同期に集落としてのピークがあるが、出土遺物の数量の変動幅が小さく、調査区も変則的であることから、未調査区域に居住施設が存した可能性も否定できない。続く後期初頭では住居跡が3棟(敷石住居を含む)検出されたが、遺物量は極少量となっており、集落として終焉を迎えた。

所謂「小梁川・大梁川編年」では、縄文時代中期が11階梯に区分された。中期初頭のⅡ期は大木6式5期~五領ヶ台Ⅱa式までの4型式が含まれ、上記した一時的な空白期を経て、Ⅲ期は阿玉台式直前型式(竹ノ下式)に並行する大木7a式の新しい部分が該当する。Ⅳ期は大木7b式の古い部分で阿玉台Ⅱa式に並行し、Ⅴ期は大木7b式の新しい部分で同8a式への過渡的段階として阿玉台Ⅱ式に対比される。以上が小梁川遺跡において、層位的に分離された成果となる。

続く VI 期は大木8a 式が該当するが、同期は遺構内から少量の土器が出土したに過ぎず、型式細分ができる状況にはない。同式は 2 細分案が通例となっている(中野2008:355-358頁)が、小梁川遺跡では同式古段階が主体で、新段階は僅か 1 点(図 9 - 97)を指摘するに留まる。続く大木8b 式も土器の総量は極僅かでしかないが、異なる地点の土器で二分されており、 VII 期は大木8b 式古段階で板沢地区に主体がある。一方 VII 期は同8b 式新段階で、180m以上離れた白ハゲ地区に主体があり、前者から後者への集落の移転が指摘されるが、住居跡の炉の形態変化からも年代差が裏付けられる。

大木9式と同10式は大梁川遺跡の層位的成果により、それぞれが2細分されている。IX期は大木9(古)式で第IV層出土土器が該当する。続くX期は大木9(新)式で第III層出土土器が該当し、更に層位的に二分される可能性が示唆されている。IX期は大木10(古)式で第III層出土土器が該当し、やはり層位的に二分される可能性が示唆されている。IX期は大木10(新)式で第II 層出土土器が該当する。大木9・10式については、それぞれを3細分以上に分割した編年研究が多々見受けられる。しかし確実な層位的検証は得られておらず、大梁川遺跡が今日においてもなお有力な指標となっている(森2008:361 – 365頁)。

地域性を考慮に入れると、両遺跡で得られた分層的成果を東北南半全体に敷衍することに問題点がないわけではないが、大木8a 式の細分が出来なかった点を除くと、両遺跡での型式細分の意義は現在でも有効であろう。但し小梁川遺跡の細別層位の出土状況は、グリッド毎の資料提示が煩雑であるため、第三者による跡付けは容易でなく、特に型式編年研究が進んだ I 期や II 期でみると、その詳細な型式細分について層位的証左を得ることはできない(小林2016)。  $I \sim V$  期と  $IX \sim XII$  期の大別的な区分では指標となり得ても、微視的区分での有用性は今後の課題であろう。

両遺跡の土器の変遷を概観すると、文様描出手法に幾つかの転換期を指摘することができる。中期初頭では体部文様帯が余り振るわず、縦位方向の回転施文による装飾的な縄文(結節回転文・羽状縄文等)が多用される。しかし縦位構成を基調とした沈線・隆線による文様が漸次発達しており、大木8a式(VI期)には体部文様帯が一般化して、装飾的縄文は姿を消す。更に文様同士の連結が進み、大木8b(新)式(II期)に区画に地文を充填する手法が出現し、続く大木9(古)式(IX期)には同手法の確立と口縁部文様帯の消失が指摘される。更に大木10(新)式(III期)には充填によらない磨消縄文手法が確立するが、これは撚糸文の採用と不可分の関係にあった。

更に書き加えると、大木8b(新)式(〒期)以前は胴部に縦位方向の縄文を施文した後に、沈線や隆線によってダイレクトに文様を描いていたが、同式から領域を区画した後に地文を施し、沈線間を研磨した調整が一般化する。そして大木9(古)式(IX期)に充填手法による磨消縄文が盛行し、大木10(新)式(IX期)に縄文施文後に無文部を磨り消す手法が確立し、後期の磨消縄文に継承される。上記から〒~IX期とIX期の時期に、施文手法上の画期が指摘されよう。

#### 註

1) 小論では東北地方の慣用に倣い、大木6式を前期末葉、同7a式を中期初頭、同7b式を中期前葉、同8a・8b式を中期中葉、同9式を中期後葉、同10式を中期末葉と区分した。従って大木7b式に対応した勝坂式を中期中葉とする関東地方の編年区分とは、差異が存している。

- 2) 原尻地区は当初「原尻遺跡」として、別個の遺跡として取り扱われていた。しかし遺構の時期が小梁川遺跡と一致し、両遺跡を隔てる盗人沢の規模も幅約20mと小さいことから、小梁川遺跡の延長と捉えられるとして、報告書の段階で同遺跡の中に含められた。
- 3) 図5の板沢地区の方形の竪穴住居跡10棟(南東群8棟、北西群2棟)は、いずれも縄文前期前葉に帰属され、 環状の集落構成には関連しない。
- 4) 小梁川遺跡の報告書では出土土器を第Ⅰ~Ⅲ群土器に区分したが、本稿ではⅠ~Ⅲ期の呼称に置き換えた。 また大梁川遺跡では第Ⅳ層土器~第Ⅰ層土器に4分されたが、本稿では小梁川遺跡に続いてⅡ~Ⅲ期と呼称した。従ってⅠ期は前期末葉大木6式期が該当し、中期はⅡ期以降となる。

# 引用文献

- 相原淳一 2001 「宮城県における縄文時代集落の諸様相」『第1回研究集会 基礎資料集 列島における縄文 時代集落の諸様相』 pp.87-108 縄文時代文化研究会
- 相原淳一 2014 「宮城県の埋設土器・埋設遺構集成」『北日本縄文時代埋設土器・埋設遺構集成』北日本縄文 文化研究会叢書 2 pp.503-603 北日本縄文文化研究会
- 相原淳一ほか 1986 『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ 小梁川遺跡 遺物包含層 原頭遺跡・養源寺遺跡・大熊南遺跡』宮城県文化財調査報告書第117集 宮城県教育委員会・建設省七ヶ宿ダム工事事務所
- 相原淳一ほか 1987 『中ノ内A遺跡・本屋敷遺跡他-東北横断自動車道遺跡調査報告書Ⅱ-』宮城県文化財調査報告書第121集 宮城県教育委員会・日本道路公団
- 相原淳一ほか 1988 『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書IV 大梁川遺跡・小梁川遺跡(石器編)』宮城県文化財調査報告書第126集 宮城県教育委員会・建設省七ヶ宿ダム工事事務所
- 池谷信之 1988 「東北地方における縄文時代中期末葉土器の変遷と後期土器の成立」『沼津市博物館紀要』12 pp.69-112 沼津市歴史民俗資料館・沼津市明治史料館
- 今村啓爾 2010 『土器から見る縄文人の生態』 同成社
- 小林圭一 2016 「宮城県七ヶ宿町小梁川遺跡出土の大木6式土器」『研究紀要』第8号 pp.21-50 山形県埋蔵 文化財センター
- 小林圭一 2017 (投稿中) 「宮城県七ヶ宿町小梁川遺跡の集落構成について」『研究紀要』第9号 山形県埋蔵 文化財センター
- 真山悟ほか 1985 『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書 I』 宮城県文化財調査報告書第107集 宮城県教育委員会・建設省七ヶ宿ダム工事事務所
- 鈴木雅編 2015 『蔵王町内遺跡発掘調査報告書 2 各種開発事業に伴う遺構確認調査・小規模開発事業に伴う 緊急発掘調査(平成25年度) 附編 1 消防庁舎建設計画に伴う谷地遺跡発掘調査概報 附編 2 谷地遺跡におけ る放射性炭素年代(AMS 測定)』蔵王町文化財調査報告書第20集 蔵王町教育委員会
- 谷口康浩 2005 『環状集落と縄文社会構造』 学生社
- 中野幸大 2008 「大木7a~8b 式土器」『総覧 縄文土器』(小林達雄編) pp.352-359 アム・プロモーション 水沢教子 2015 「五 縄文土器と原始社会」『東北の古代史1 北の原始時代』(阿子島香編) pp.139-171 吉 川弘文館
- 宮城県教育委員会編 1988 『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書付編』宮城県文化財調査報告書第126集 宮城県教育委員会・建設省七ヶ宿ダム工事事務所
- 村田晃一ほか 1987 『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ 小梁川遺跡』宮城県文化財調査報告書第122集 宮城県教育委員会・建設省七ヶ宿ダム工事事務所
- 森 幸彦 2008 「大木 9・10式土器」『総覧 縄文土器』(小林達雄編) pp.360-367 アム・プロモーション 山内清男 1937 「縄紋土器型式の細別と大別」『先史考古学』第 1 巻第 1 号 pp.29-32 先史考古学会

# 図版出典

図1~3:国土地理院(1996年3月)「1:500.000地方図(3)東北」をベースに作成

#### 縄文時代中期「小梁川・大梁川編年」に関する覚書

図4:(宮城県教委編1988:付図)改変

図5:(村田ほか1987:第6~11図)をベースに作成

図6:(相原ほか1988:第2・8・9図)改変

図 7 - 1 ~13・15・16・18~21・23・24・26・27・29・31~33:(村田ほか1987)、14・17・22・25・28・30:(相原ほか1986)

図8-34・35・53・68:(村田ほか1987)、36~52・54~67:(相原ほか1986)

図 9 -69・73~76・79~81・84~102: (村田ほか1987)、70~72・77・78・82・83: (相原ほか1986)

図10-103~111:(村田ほか1987)、112~159:(相原ほか1988)

図11-160~215: (相原ほか1988)